

# 登山・登攀の記録

## 北アルプス 劔岳東大谷右尾根

日時：2002年12月28日～1月9日

メンバー：伊藤達夫（コーチ）、中西博己

概要：馬場島～東大谷右尾根～早月尾根下降  
記録

12月28日 晴のち雪

行動：伊折(7:00)－馬場島(10:50)－菊石(14:00)、偵察から帰着(14:50)

車で伊折まで入る。午前4時。明るくなるまで仮眠をとることにする。6時ごろ目を覚まし、荷支度を済ませ、出発する。荷物は重く、伊折から馬場島に至る8キロの道のりはとても長く感じた。馬場島の県警の詰め所で、お茶と発信機「ヤマタン」を頂く。雪崩で埋まったり滑落で死んで始めて効力を発揮する「ヤマタン」には世話になりたくないものである。再び重い荷物を背負い、立山川方面に向かう。雪上車のトレースがなくなるところでワカンを装着する。そうこうしているうちに奥大日7人パーティが追いついてきて、すごいスピードでラッセルを開始していった。あれよあれよといっているうちに進んでいくのはやはり7人力のお陰である。我々も負けじと先頭集団に追従する。雪の状態は劔特有の湿重雪。ワカンに雪がついてきて、まるで囚人の足にくっついている鉄球のようである。7人パーティのラッセルの先頭を僕が交代して、菊石の手前の広い場所(立山川左岸)に至り、7人パーティはここでテントを張るようであった。我々も休憩を取り、もう少し進んでおくことにする。あまりにも荷物が重いのと湿重雪で僕は右足付け根を傷めてしまい、足をあげるのにも手を使わなくてはならない状態になってしまった。とりあえずダブルボッカで菊石まで進むことにする。まず空身でトレースをつけて、次に荷物のかついでいく。寝不足と痛みでふらふらである。菊石から大日側からのルンゼが入っているところまで偵察を行い、菊石でテントを張った。見たところやはり降雪中は動けないだろう、ということだった。

12月29日 雪 停滞

5時に起きるも、外は静かに深々と降りしきる雪。核心部の立山川ゴルジュに突っ込むのは危険す

ぎるし、命が惜しいので停滞を決め込む。

12月30日 晴ときどき曇

菊石(7:30)－スナクボ岩屋(10:00)－ゴルジュ中心部(12:40)－東大谷左尾根末端付近(15:00)  
5時に起床し、高層天気図をとる。横流れの高層であり、割と安定しているようだ。新雪で消えた、昨日つけたトレースの後を追う。新雪は気温が低いので軽く、足への負担も軽い。立山川の左岸沿いをラッセルしてゆく。ひざ上くらいか。今回も二人なので、ラッセルは大変である。あまり休みを取らずにどんどん進む。向かう先に右尾根とおぼわしき尾根が見えてくる。あまり休まずラッセルし、地図に記されている夏道どおり(夏に行ったことないんだけど)、早月1900mから延びている尾根に取り付く。高低差50mほど登り、トラバースをする。心配していた、谷の最も狭い箇所を覗き込む。「埋まっている！よっしゃ」。さっそく谷底に降り、デブリの上をワカンをカリカリ言わせつつ、安心感に浸りつつ歩く。「やれやれ、とにかく通過できましたね」と言葉を交わす。ここからは立山川左岸を歩く。危険ルンゼと勝手に名づけていた西大谷山のルンゼの出合もさっさと通過できた。右尾根の取り付きも姿を表す。東大谷の流域に入り、大日側の斜面が急になってきたので、東大谷を渡って右岸に渡ろうという話になった。難なく流れの近くまで近づき、そっと渡ろうとした時、いきなり足元が崩れる。ピッケル1本で体を支え、這い上がろうとした時、本格的に崩れてしまった。「だめだあ」。両足と尻と右手をザブリとしてしまう。伊藤先生は少し下流で渡り、濡れずに済んだ。まあ、仕方ないねえ。意味ある犠牲ってことにしておこう。渡って多少歩いた所をテントサイトとする。さっき僕が落ちた所で水を汲み、燃料を節約する。そのかわ

## 登山・登攀の記録

り、濡れてしまったものを乾かすのに燃料を使ってしまったので、あまり節約にならなかった。とにかく、最初の核心部を安全に通過できた。次は右尾根である。地図を見る限り、たいしたことはなさそうだ。

12月31日 曇

行動： 東大谷左尾根末端付近(7:15)－右尾根支尾根取り付け(9:05)－右尾根本体合流(12:50)－1950m 付近(15:40)

小雪ちらつく中、出発する。霧が濃く、視界があまり利かない。時折、霧が薄くなる。ほうほうのいで取り付けまでラッセルする。尾根の取り付けは急で、新雪の層を崩してから圧雪して進んでゆくとというスタイルをとる。尾根らしくなってからも、所々笹がのぞく亀裂が隠れており、なんじゃこりや、とわめき散らす。嫌になってきたころ、霧が晴れだし、時折、東大谷や大日側の尾根が見えてくる。歓喜の声をあげる。景色をほんの少し見れたことでちょっと元気になる。漸く尾根の傾斜も落ちてきて、ダブルボッカに切り替える。息も絶え絶えになりつつ、1950m 付近のダケカンバと針葉樹の生えた木陰をテントサイトとした。

1月1日 快晴

行動： 1950m 付近(7:10)－アイゼンを履く(13:00)－尾根の終了点 2700m 付近(16:00)－劔山荘(16:30)

今日もワカンを履き、新雪の層をピッケルを振り回してこそげ落としてラッセルというスタイル。全身が疲れる。急で細い雪稜を登る。今日は天気も良く、さらに東大谷、大日側ともに美しい。嘆息する。我々の行く雪稜は細く急で、雪庇の発達も複雑で(東大谷側から吹き上げている所と大日側から吹き上げている所がある)、かなり気を使う。風雪の中だと、ここはすごく恐ろしいところだと思う。絶対ザイルをつけて確保しておかないといけないだろう。高度も2300m 過ぎた所で漸くアイゼンを履く。アイゼンを履いてからもラッセルは深い。向かう尾根はやたら急になり、ちょっとだけめげて、尾根に忠実に登ることをせず、ルンゼを渡り、左の尾根へと移る。左の尾根に移るとカリカリの斜面。高度

を稼がせてもらう。だが、ラッセルは風の弱い所は再び腰近くまであり、もうちょっとめげる。どんどん登ってゆき、最後、稜線直下もかなり急な岩稜帯になっている。かなりめげてきて、「左へトラバースしてうまいこと行くかもしれん」との期待を込めて、トラバースしてゆく。だが、そんなに甘いものではなく、最後の最後で深いルンゼが入っていて、通行不能。ああ。少し戻って、先に見上げたのとは別の岩稜帯を登り、小さなルンゼ状を登ったら、稜線であった。完登を祝い、握手を交わす。かなり疲労している。最後の力を振り絞り、劔沢側のルンゼを下り、劔山荘まで重力に任せて下ってゆく。劔山荘の前の雪が吹き溜まらないところにテントを張ることにする。

1月2日 雪のち晴

行動： 劔山荘(8:00)－クロユリのコル(10:00)－劔山荘(11:00)

8時過ぎ、出発するものの、稜線まで、胸までのラッセル。ホワイトアウトの中、2時間かかって稜線につくものの、暴風が体の体温をどんどん奪うのが分かる。「これは死ぬ」と思い、一服劔をあきらめ、風の弱い所まで少し戻ることにする。雪洞を掘ろうとするが、ふかふかの雪で、だめだった。仕方なく、吹き荒れる中、劔山荘に戻ることにするが、もはやトレースも消えかかり、コンパスを頼りにひどいホワイトアウトの中、泳ぐように雪の中を降りてゆく。時折強風が吹き、ふかふかの雪に体が倒されてしまう。強風で息もあまり出来ない。おぼれているようだ。睫毛が凍り、前も見ることがおぼつかなく、自信もあまりなく降りてゆくと、一瞬、黒い影が見えた。劔山荘だった。「助かった」。こんな中、小屋を探して、うろうろしていると、まじで死んでしまうだろう。再び、小屋の前にテントを張ろうとするが、トラブル発生。テントの立ち上げの際、ポール継ぎ目が、弾けるような音を立て裂ける。エマージェンシーパイプを通すのにも苦労した。継ぎ目をバイルで叩き、裂けた部分にパイプをなんとか通した。テントに入ってから、「また、ポールが風で折れるんじゃないか」という恐怖感から、暫くはブーツを履いたままで待機していた。少し風も収まったころ

## 登山・登攀の記録

に、荷物をばらした。雪まみれのヤッケを乾かしていると、15:00 ごろ、明るくなってきた。なんと晴れていやがる。ああ、なんてことだ。今から動く気もせず、悲しく不安な気持ちになる。

1月3日 雪 停滞

7時ごろ出発しようとするが、ホワイトアウト気味にて中断、待機する。再び、出発しようとするがだめだった。昨日の悪夢がよみがえる。仕方なく小屋の前に雪洞を掘ることにする。トンネルを掘って奥をテントの大きさになるまで広げて、テントを張った。

1月4日 雪 停滞

5時に起き、高層を取る。オホーツクの低気圧はぐるぐる回る気配。だめだこりゃ。1月

5日 雪 停滞

高層を取るものの低気圧は回っている。時計の気圧グラフは下がる一方で上がる気配はない。高気圧と低気圧の気圧差も60hpaを超え、どんよりとした気持ちになる。とにかく燃料節約のため、寒いが横になり続ける。行動食と夜の一食だけ取って、再び眠る。

1月6日 雪 停滞

高層の放送は昨日で終わってしまったので、地上天気図を取る。中国に高気圧が出来ている。が、弱い。しかし、冬型も徐々に緩む傾向にあるので、喜んだ。

1月7日 雪

行動： 劔山荘(7:20) — 一服劔(9:10) — 前劔(10:30) — 平蔵の科尔(12:05)

日の出のころ、晴れていたのだが、行動を開始するころには再び雪になっていた。が、視界は割りとある。時折、前劔が見える。必死にラッセルをする。体が鈍っていて、少し動いては立ち止まっていたが、次第に体が慣れてきた。クロユリの科尔はやはり風がきつかったが、「行くんだ！」と耐えて、一服劔へ向かう。一服劔からはわかりかし、風の弱い所があり、助かる。クロユリから一服までは東大

谷の風をさえぎるものがないから、大変である。強風でふらつきながらも、前劔に向かう。前劔の登りは最後のほうで雪壁となる。前劔の大岩から、左のほうに行き過ぎて、雪の層を踏み抜いて空間と岩が出てきてしまったので、すこし右のほうのラインを選んで登る。だんだん雪が強くなってきている。視界は50m以下か。前劔を上りきり、下りにかかる。夏は鎖場の下りなのだが、雪がべっとりついているので、クライムダウンできた。「しんどい、しんどい」とうめきつつも着実に進み、平蔵の科尔でテントを張った。時間はあったが、雪が強くなってきたし、明日は天気よさそうだし、無理することないかと、本峰はあきらめる。

1月8日 快晴

行動： 平蔵の科尔(7:50) — 本峰(9:00) — 早月2600m(12:45/13:00) — 早月小屋(15:00) — 早月1900m付近(16:45)

漸く、晴れた。青空がまぶしい。アンザイレンして鎖場とはしご場を登る。ぼちぼち登っていると本峰についた。ザイル確保して、源次郎パーティの偵察を行う。が、気配はないようであった。快晴で風もほとんどなく、大パノラマである。後は、早月の下りである。緊張する。別山尾根と早月尾根の分岐から50mほど下って東大谷側のルンゼを下る。岩角でビレイし、今度は池ノ谷側のルンゼを下る。30mほど下って、向かって左下の岩の基部にはハーケンがある。もう少し下ると右にビレイ点がある。岩を池ノ谷側に沿って下り、シシ頭でビレイする。ヘリの音がして、県警の「つるぎ」が接近してくる。シシ頭の鎖に沿って登り、小ピークを池ノ谷側に向かって下降。あとはほとんど東大谷側を回りこむはず。ピラミッドを登って上部の岩のハーケンに中間支点を取ってピラミッドを下る。後は2600mのピークに登って、一段下ったところで休んだ。2500mまでの下りも結構急だし池ノ谷側に雪庇が出ている。早月小屋の上、樹林帯に入る2350mでザイルをしまい、ワカンを履いた。腰近いラッセルにめげるが安全圏にきたのでうれしい。雪が多く、早月小屋は屋根まで雪に覆われていた。途中うっすらと残る警備隊トレースに助けられつ

## 登山・登攀の記録

---

つ 1900m まで下ってテントを張った。

1月9日 快晴

行動： 早月 1900m(7:30)－馬場島(10:00)－伊折(12:20)

夜は寒くて辛かったが、元気に出発する。かすかに残ったりくっきり残ったりしている警備隊スペシャル・最短トレースを追ってどんどん下ってゆく。あっという間に馬場島に着いた。